

## 万葉集と明石・いなみ野・加古川

### ○「平成」から「令和」へ

2019年4月1日、政府は「平成」代わる新元号を「令和」に決定しました。新元号「令和」の出典は現存する日本最古の歌集「万葉集」(奈良時代末期に成立。大伴家持らが編者。聖武天皇の頃までの4500余首を収録。全20巻)で、その巻五「梅花の歌三十二首」の前に置かれた漢文の「序」から採られました。外務省は、「令和」の意味を外国政府に英語で説明する際に、「Beautiful Harmony=美しい調和」という趣旨と伝えるよう指示したそうです。5月1日、新天皇即位とともに、元号は平成から令和になりました。以来「万葉集」は脚光を浴び、令和に関連する話題も多いです。

### ○「いなみ野万葉の森」と「令和」

稲美町国安の「万葉の森」は、町制施行30周年記念事業の一環として昭和63年に完成した万葉植物(万葉集に詠まれている植物)を植栽した池泉回遊式縮景日本庭園。万葉の昔。明石川流域から加古川流域に至る東西約20km、播磨灘から雌岡山に至る南北10数kmの野は「印南野」と呼ばれ、これに面する海は「印南の海」と呼ばれていました。万葉集には「印南野」に関係する歌が30首も詠まれ、その中には、歌聖と呼ばれる柿本人麻呂や山部赤人(「印南野の 浅茅押しなべ さ寝る夜の 日長くしあれば 家し偲はゆ」)のものも含まれています。ここに植えられた植物やその歌(陶板の歌碑約50基)を通じて万葉の人々を偲ぶことができる約8,500㎡の庭園です。

「らに」(蘭)の陶板歌碑に令和の典拠となった梅花の歌の序が記されています。解説には、「この歌碑では、偶然にも右から『令』『和』の文字が横並びになっています。なお、碑上で作者が『大伴池主』となった経緯は不明です」と書かれています。

### ○印南の海(明石・播磨町・加古川・高砂)

東の明石川流域から西の加古川流域までの東西約20kmの海岸線(明石浦付近～曾根付近 播磨灘東部)は「印南の海」と呼ばれています。また、兵庫県最長の加古川は、昔は印南川と呼ばれていました。

万葉集は、天皇・皇子から庶民まであらゆる階層の生きた声が表現されています。播磨を詠んだ歌はおよそ40首、その多くは「羈旅歌(きりょか)」「旅の歌」といわれています(『BanCul はりまと「万葉集」』2019秋号)。作者不詳のものや瀬戸内海を船で西国に赴任した役人、宮廷歌人として天皇の行幸に随行した者などが播磨を通る時などに歌を残しています。

山部赤人は、聖武天皇の印南野行幸に付き添う従



者として「沖つ波 辺波を静けみ 漁りすと 藤江の浦に 舟そ騒ける」と藤江の浦(写真左上)を詠んでいます。また、同じく聖武天皇に随行した歌人の笠金村は「行き廻り 見とも飽かめや 名寸隅の 船瀬の浜に しきる白波」と、名寸隅(行基の魚住泊か? = 現江井ヶ島港 赤根川の河口付近 写真上中央)を詠んでいます。また、白鳳時代の歌人の柿本人麻呂は「名ぐはしき 印南の海の 沖つ波 千重に隠りぬ 大和島根は」や「荒たへの 藤江の浦に すずき釣る 海人とか見らむ 旅行く我に」、「稲田野も 行き過ぎかてに 思へれば 心恋しき 加古の島見ゆ」など、印南の海の各所を詠んでいます。加古川は現在は河川改修され、大きな河口一つ(写真右上)となっていますが、昔は下流部が幾筋にも分かれ、島のような中洲がたくさんあったようです。聖武天皇の行幸時(726年)に滞在した場所が、ぼたん寺で有名な魚住町西岡の薬師院(寺伝では行基開基)の直ぐ東、天王神社(写真右)といわれています。

### ○畿内と畿外を分ける明石の大門(おおど) 明石海峡

明石の大門(明石海峡)以西は畿外、都である大和から見ると「異郷」とされた時代に、この境界を通り九州方面へ向かう官人や防人たちの悲哀、また都へ戻る喜びなどが歌に託されていました。柿本人麻呂は「燈火の 明石大門に 入らむ日や 漕ぎ別れなむ 家のあたり見ず」、「天離る 鄙の長道ゆ 恋ひ来れば 明石の門より 大和島見ゆ」と詠み、「粟島に 漕ぎ渡らむと 思へども 明石の門波 いまだ騒けり」という作者不詳の歌もあります。明石市立天文科学館の直ぐ北にある柿本神社(明石市丸町)は柿本人麻呂を祀っています。全国に70以上の縁の寺社があるそうです。この神社から明石海峡が一望できます(写真上右 写真上左は五色塚古墳より海峡)。



【参考文献】『BanCul はりまと「万葉集」』(2019秋号 姫路市文化国際交流財団)

